

神奈川大学図書館「山口文庫」とセー自筆の書き込み フランスから日本にわたったJ.-B. セー旧蔵書200年の不思議な旅

出 雲 雅 志

この小特集は2017年11月16日に開催された神奈川大学図書館セミナー「山口茂、山口文庫、J.-B. Say—生き続ける知の遺産—」でのジャン＝ピエール・ポティエ（リヨン第2大学名誉教授）と喜多見洋（大阪産業大学教授）、高橋則雄（元神奈川大学図書館事務部長）3氏の報告をまとめたものである。

神奈川大学図書館が主催し神奈川大学資料編纂室が共催したこのセミナーの発端は2年前にさかのぼる。2015年12月1日、「神奈川大学図書館が所蔵する「山口文庫」にジャン＝バティスト・セーの旧蔵書がないか調べてほしい」というメールがポティエ教授から届いた。セーの孫イポリット・コントの蔵書印があればセー旧蔵書の可能性が高い、しかもそこにセー自筆の書き込みがあるかもしれない、という。フランスで刊行中の『セー全集』編集者のひとりポティエ教授は、このとき、フランス国内外に散逸したセー旧蔵書の書き込みや注釈を探し集め『セー全集』第7巻にまとめる準備のさなかにあった。

さっそく図書館職員の荏原直子さんの案内でゼミの学生数名とともに「山口文庫」を調査した。すると、ポティエ教授のにらんだとおり、イポリット・コントの蔵書印「BIBLIOTHEQUE HIP. COMTE」が押された書籍20タイトル36冊と、セー自身のものと思われる欄外の書き込みのほか、はさみ込まれた紙片に書きとめられた注釈がたくさん見つかった。これは歴史的な発見といってよい。それまで、日本にあるセー旧蔵書は、一橋大学社会科学古典資料センターが所蔵する David Ricardo, *On the Principles of Political Economy and Taxation*, 3rd. ed., 1821と Thomas Robert Malthus, *Definitions in Political Economy*, 1827の2冊だけしかない、と考えられていたからである^[1]。

[1] この2冊へのセー自筆の書き込みに関する調査は喜多見洋教授によって行われた。

「山口文庫」は、1954年に一橋大学を退官し神奈川大学教授に就任した山口茂（やまぐちしげる1893-1974）が、1966年、神奈川大学図書館に寄贈した洋書1,316冊と和書1,078冊あわせて2,394冊からなる蔵書コレクションである^[2]。専門分野の金融論をはじめとする経済学、法学、哲学、歴史など多様な分野の書籍から構成される多数の貴重書が以後の神奈川大学図書館の貴重書コレクションの出発点となった^[3]。

山口は1925年から1927年のあいだ英・独・仏・米に留学した。おそらく、そのときに買い込んだ多くの書物のなかにこのセーの蔵書が含まれていたのだろう。それにしても、セー自身による書き込みのある書物が、「山口文庫」にこれほどたくさん眠っているとは誰が想像しただろう。「山口文庫」にセーの旧蔵書があることはこれまでまったく知られていなかったのである^[4]。

フランスから日本にわたったジャン＝バティスト・セー旧蔵書の200年におよぶ不思議な旅の全容は、まだすべて解明されたわけではない。しか

^[2] 本文庫の目録として『神奈川大学所蔵 山口文庫目録』（1978年）がある。なお、ドイツ日本研究所が調査した「日本の大学所蔵特殊文庫データベース」にも本文庫の紹介がある。

^[3] 山口茂は神奈川県に生まれ、暁星中学校を経て、東京高等商業学校（後に東京商科大学、一橋大学）および同専攻部を卒業後、1921年から1954年まで母校で助教授・教授として教え、商学部長、図書館長を務めた。神奈川大学では、創立まもない横浜専門学校時代に1929年から1941年まで非常勤講師を務め、一橋大学を退官した1954年から1969年まで教授として教育・研究に尽力し、経済学部長、法人理事などを歴任した。著書に『流通経済の貨幣的機構』（1939年）から『恐慌史概説』（1970年）にいたる多くの著書があり、『銀行実務小辞典』（1970年）などの編著をあわせると60以上にのぼる。経済学史の分野でも、山口茂・菅間正朔共訳のシスモンデ著『政治経済學新原理』（1942年）と山口茂『セイ「経済学」』（1948年）がある。なお、山口茂の年譜と著作目録については神奈川大学商経法学会（1964）を、また「山口文庫」とその学問については吉田（1965）および船越（1975）を参照。

^[4] 一橋大学が所蔵するセー旧蔵書2冊も、山口茂が1943年9月16日に東京商科大学へ寄贈したものである。このことから、神奈川大学「山口文庫」にもセー旧蔵書があることを予測しておくべきだった。それに気づいたのは、うかつにも、ポティエ教授からの依頼のメールが届いてからのことである。なお、日本にはもう数冊のセー旧蔵書が存在するらしい。明治大学の教授だった関未代策の個人蔵書（関（1953）および報告①の訳注②を参照）と、失われたかもしれない山口茂の旧蔵書の一部である（依光（1975）、船越（1975）参照のこと）。

し、このセミナーによって、時代をこえて生きつづける知の遺産「山口文庫」とそこに残されたセー旧蔵書の歴史的意義が明らかにされたばかりか、山口茂がかつてその一端を担い築きあげた神奈川大学のよき伝統と学风があざやかに描きだされた。この遺産と伝統をどう継承するかは、あとにつづく者に残された課題である。

最後になりましたが、ジャン＝ピエール・ポティエ、喜多見洋、高橋則雄、竹永進（大東文化大学教授）の各氏、山口茂先生のご家族、山口茂ゼミの卒業生、図書館職員、資料編纂室職員、そしてご参加くださったみなさんに、こころよりお礼申し上げます。

参考文献

- 神奈川大学商経法学会（1964）『商経法論叢』（山口茂古稀記念号）第14巻第3号、1月。
関末代策（1953）「ジ・ベ・セーの学説（1）」明治大学『政経論叢』第2巻第4号、3月。
船越経三（1975）「山口先生の学問と「山口文庫」について」山口茂先生追悼記念集編纂委員会『寸陰是惜八十年—山口茂先生追悼記念集—』（非売品）。
吉田静一（1965）「「山口文庫」について」神奈川大学同窓会『宮陵』第20号、12月。
依光良馨（1975）「感謝をこめて」山口茂先生追悼記念集編纂委員会『寸陰是惜八十年—山口茂先生追悼記念集—』（非売品）。